

上で発表され、その集大成が季節予報指針（気象庁刊行）としてまとめられております。

ごく最近の長期予報研究の動向については、よく知られていると思いますので、今回は特に述べませんが、私としては、これまでの研究で、日本における異常天候の実態が、少なくとも同時関係において、平均天気図上でかなり明確になってきたと信じております。何でもないことのようにですが、方法はともあれ、対流圏や成層圏の天気図上で、長期予報ができるようになったことは、戦前のことを考えますと、本当に隔世の感に堪えません。この藤原賞の内定を同僚の方から知らせて頂いたのは、北海道ではまだ肌寒い3月のある日のことでした。窓の下に見える構内の庭には、浅黄色の落の臺が土の中から芽を出していました。その時浮んだのが次のような句です。

学会の受賞の電話 落の臺 雪華

長い冬の間、雪の下に埋れていた落が、春と共に芽を出してきたのが、何となく長期予報が長い日蔭暮しの時代から漸く芽を出して来たのに似たように感ぜられたのです。この芽を出した長期予報が将来すくすくと伸びて、落の葉のように大きな発展を遂げることを望んでやみません。

私の本日の受賞は、多くの諸先生方のご指導と、長期予報グループの多くの同僚のご協力によるものと衷心から厚くお礼申し上げます。ただこの喜びをお知らせする Scherhag 教授は既にこの世にいないことが残念でなりません。でもせめても慰めは、偶然といひましょうか、先生が亡くなられる前年の昭和44年の3月に、この気象学会で先生を日本へ招待し、親しくそのけい咳に接し、また多くの講演をお伺いすることができたことでした。最後になりましたが、日本気象学会の今後のご発展を望んでやみません。

（次ページのつづき）

今までのシュミレーションの結果では、射出更正量 ΔT は、観測放射量に対する等価黒体温度と、可降水量の多少を示すパラメータの函数として表現されることが明らかとなり、経験的射出更正方式も十分に実用に耐え得ると考えられている。

射出更正は、吸収物質の分布以外に、観測対象物質の射出率に対する補正も含まれるが、海面の射出率は、衛星天頂角が 60° 以下では、ほぼ0.95程度であるので、この効果は無視出来る。しかし、地表面温度や雲頂温度を求める時には、射出率の変化に対する補正も必要となる。
(山本孝二)

境」として上の高エネルギー粒子に加えて、地球周辺磁場、太陽X線も観測対象に入れている。（河野毅）